

茂吉と金瓶(蔵王)

蔵王山麓に生まれ、朝夕この山を見上げて育った茂吉は、帰郷した際には折あるごとに間近にそびえる蔵王をながめていました。

昭和二十年四月、戦火を逃れてふるさと金瓶に疎開した茂吉は、妹の嫁ぎ先(斎藤十右衛門家)の土蔵を借りて生活をはじめます。

そして、ここで終戦を迎え、荒廃した時代を悲しみながらも、近くの山や川のほとりを散策することで、少年時代の思い出になぐさめられながら、やすらぎを得た生活を送りました。

朝ぐものあかあかとしてたなびける
蔵王の山は見とも飽かめや

歌集『石泉』

夏されば雪消わたりて高高と
あかがねいろの蔵王の山

たましひを育みますと聳えたつ
蔵王のやまの朝雪けむり

歌集『小園』



金瓶疎開中の茂吉(昭和20年6月)
畑仕事を手伝う茂吉ですが、慣れないのでうまく出来なかったようです。